報告書

福島県相馬市における「音楽による生きる力をはぐくむ事業」に関する調査・分析・評価

～エル・システマジャパンの活動の社会的インパクト評価～

2017年3月31日

慶應義塾大学
SFC研究所

©2016 Keio SFC Research Institute

福島県相馬市における「音楽による生きる力をはぐくむ事業」

一般社団法人エル・システマジャパンが実施する福島県相馬市における「音楽による生きる力をはぐくむ事業」は、相馬市の子どもなら誰もが参加可能な音楽教育プログラム。音楽を核にして子どもたちが成長し、子どもたちの成長を通じて地域全体が活性化することを目指す。東日本大震災後、子どもたちの心のケアを目的に2012年より事業を開始し、弦楽器教室・コーラス教室の開催と発表会・イベントの開催に加えて、公教育支援を実施する。現在では教室に約150名の子どもたちが、公教育支援で約2,000名の子どもたちが参加している。年に1度行われる自主開催の「子ども音楽祭」は、子どもたちを含めて多くの地域住民が参加する発表のイベントとなっている。

弦楽器教室・コーラス教室の実施

自主開催の子ども音楽祭や敬老会での演奏の様子

公教育支援（鑑賞教室・音楽授業の支援）

その他の演奏会（海外団体との交流事業）の様子

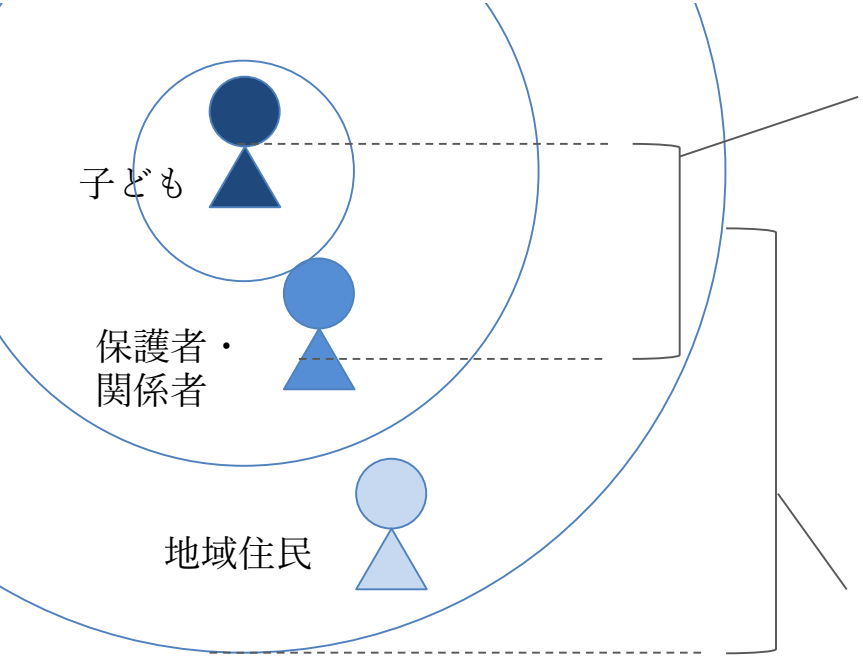
子どもたちの成長と地域の活性化につながる

※写真はエル・システマジャパンより提供

©2016 Keio SFC Research Institute

調査手法と調査範囲

「音楽による子どもたちの成長」および「地域の活性化」を可視化するため、参加者を含めた**地域の人々が自ら参加するインタビューに重きを置いた調査を実施**した。複数年度の調査計画とし、今年度は特に子どもたちの成長に焦点を置き、関係者からの直接的な声の収集、集合化と言語化を行った。そこから各アウトカムを明確にし、アンケートを用いてより広い関係者からの期待度・実現度を明らかにすることを目的とした。次年度以降、さらに地域への波及効果を可視化することを想定している。



2016年度の調査範囲

1. **参加者・地域住民間の対話を促し**、関係者間のつながりを強化する
2. 事業がもたらす子どもの成長を**参加者・地域住民間の対話と声を通して言語化**
3. 子どもの成長に関するエル・システマジャパンへの期待度と実現度の可視化
4. 一部の関係者への波及効果の言語化及び期待度・実現度の可視化

2017年度以降の調査範囲（予定）

1. 地域全体への波及効果の言語化及びその期待度・実現度の可視化

©2016 Keio SFC Research Institute

調査結果の要旨

福島県相馬市における「音楽による生きる力をはぐくむ事業」に関する調査・分析・評価を通じて、参加者・関係者の声により実施事業の成果・課題と期待及び今後の展望は下記のようにまとめられる。

成果	• 弦楽器教室・コーラス教室に参加する子どもの「音楽を自由に楽しむ」ことや「音楽を通して自分に自信がつくこと」を中心に子どもたちの成長について複数の成果が認識されている 　• 特に「自由に友だちと音楽を楽しむ」「努力をして何かを成し遂げる」「自分に自信を持つこと」等が挙げられた • 発表会やメディアを通じて子どもたちの音楽性の成長を認識する声が多い
課題と期待	• 公教育支援を含め参加人数が全体として少ないという認識がある。地域住民からの認知度が高くないと認識されている。よって、より多くの人に浸透してほしいという声が多い • 教室間で提供される価値が異なるという認識が一部あり、実際にアンケートより子どもたちの礼儀正しさやリーダシップにつながる行動等の認識に差が見られた • 今後さらに成果として求められる項目は、「（音楽を通じて）地域がいきいきとすること」「リーダシップを身に着けること」「将来地元に貢献したいと思うこと」等が挙げられている
今後の展望（提言）	• 将来的に子どもたちが地域に関わることを望む声が多いため、地域との関わりについての可能性をさらに検討する • 自発的に参加する子ども・地域住民がより増えてほしいという声が多いため、認知を広める活動について検討する • 今後も子どもの成長と地域の活力のために、実施事業を継続する • 団体のビジョン・ミッション・バリューを明確にしつつ、地域や教室間でどのような価値創出を共通とするのかの検討を含め、評価結果を組織や運営体制の維持・改善に役立てる

©2016 Keio SFC Research Institute

調査全体の流れ

インタビュー実施

- 各関係者へのインタビュー・ワークショップの実施
- 対象の関係者（協力が得られる範囲で抽出）
  - 活動に参加する子ども・保護者
  - 団体の職員
  - 行政関係者や学校関係者
  - その他の市民等
- 質問内容
  - 実施事業に関わった背景
  - 現在の関わり
  - 実際に感じている期待・成果や課題
- インタビュー手法
  - 関係者間の対話や気づきを促すよう分類の近い対象者へのグループインタビューを主体
  - ワークショップは4~5名のグループでの自発的に議論を促す設計
- アウトプット：ヒアリングメモ作成

ロジックモデル作成・関係者分析

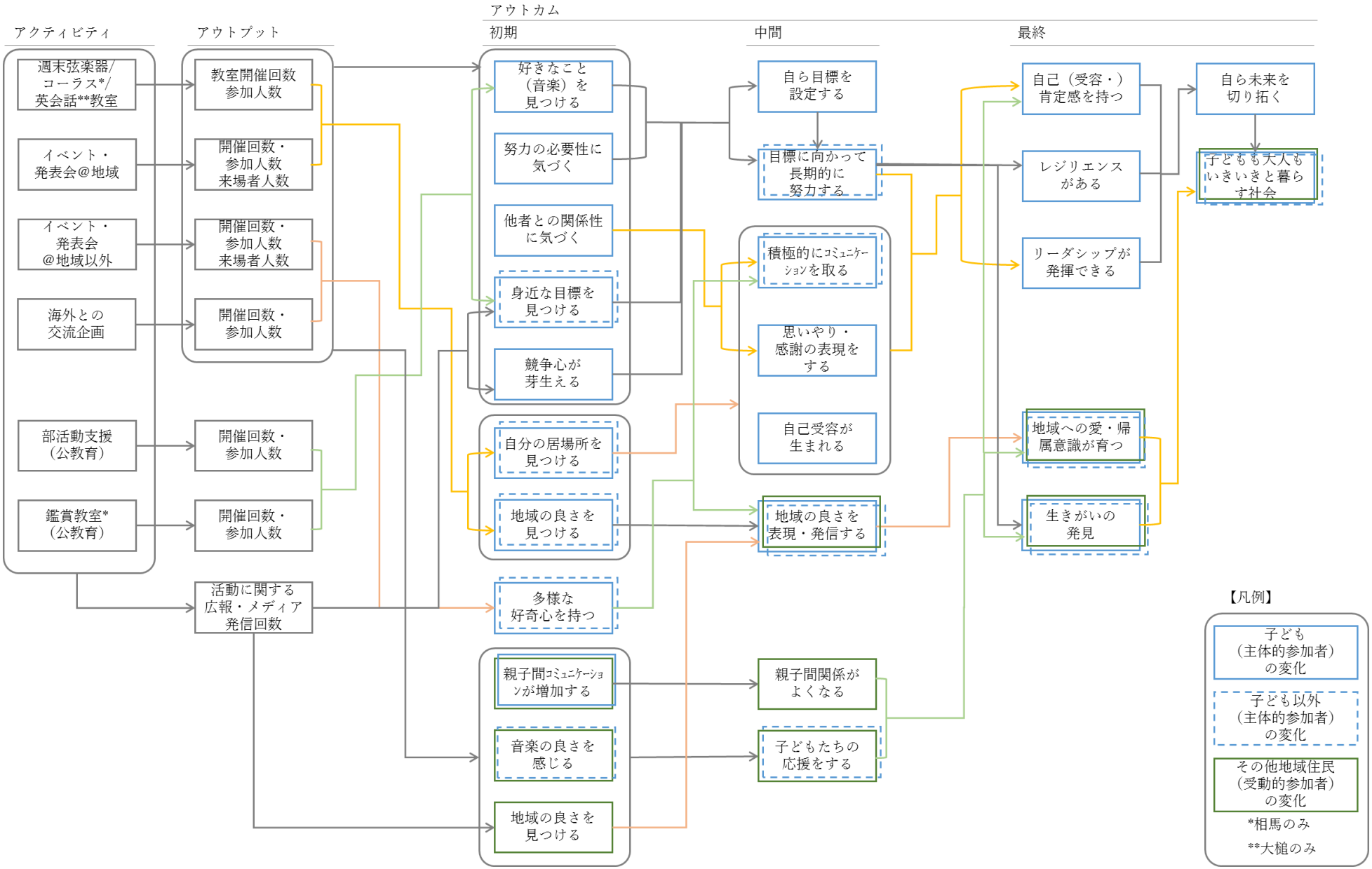
- インタビュー・ワークショップからの項目抽出と頻出度整理
  - 頻出の項目を類似項目で整理
  - 各項目のインタビュー・ワークショップ中での頻出度をカウントし、並べ替え
- 項目のインプット・アウトプット・アウトカム（初期・中間・最終）としての整理
  - 団体のミッション・ビジョンと照らし合わせ
- ロジックモデル作成
  - インプット～アウトカムまでを並べ、その因果関係を仮説でつないだ
- 項目の対象者整理と対象者セグメンテーション
  - 多くの項目は子どもに関するもの
  - 子ども以外への効果は別途その項目を追記
  - 関係者を活動の関与度別にセグメンテーション下

アンケート実施・分析

- アンケート項目の作成
  - ロジックモデルに基づき、各項目の期待度・実現度を可視化するためのアンケート作成
  - 質問項目は約50項目
- アンケートの実施
  - アンケートを対象者に配布、各自回答を依頼
- アンケート分析
  - 回答の実現度・期待度のそれぞれ分析
  - 実現度/期待度の計算で各項目の実現率を算出
  - 実現率比較による関係者間・地域間の状況の比較

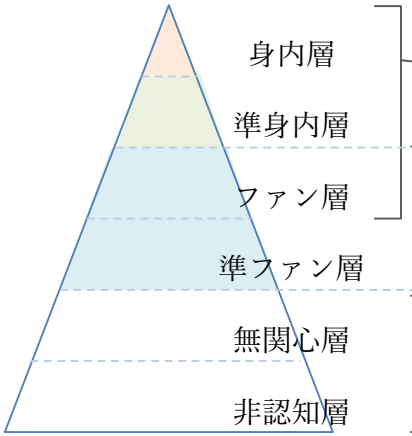
©2016 Keio SFC Research Institute

作成されたロジックモデル：参加者・地域住民へのインタビューやワークショップを通じて得られた声を抽出して作成



©2016 Keio SFC Research Institute

現状の対象者層の団体への期待と現状の認識・評価



団体への期待

1. 参加している子どもの成長
2. 子ども以外の参加者としての自身の喜びや成長
3. 地域の活力につながること

上記に加えて

4. より幅広い子どもへの支援
5. より広い地域住民への価値提供

特に意見なし

現状の認識・評価

1. オーケストラとコーラス、及び経験年数の違いにより表れている全体的な成果・課題が異なるが、音楽を楽しむこと、自信を持つこと等一部の成果が共通して表れている
2. 子どもたちの成長を通じて地域のPRにつながっているという声も挙げられた
3. 地域の活力につながることは、期待度が高いが長期を要するため、現状では実現度が低い
4. より客観的な意見になると、現状週末教室に参加している子ども以外の教室への新規参加者の募集や、公教育の支援の充実を望む声が多い
5. 地域住民の認知度が低いという意見や、子どもたちと地域の関りが少ないという意見が身内層～準ファン層まで聞かれている

今後求められることと実施事業の関係者分布の分析

今後求められること

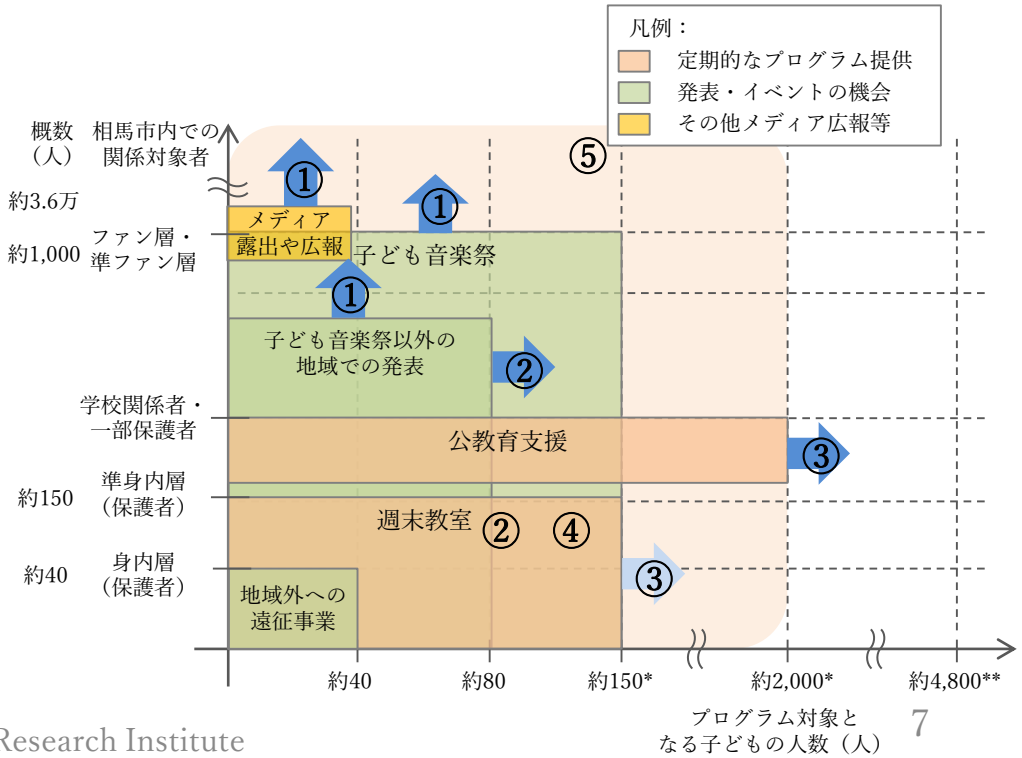
① **地域内での認知度向上を通じたつながりの強化：**
子ども音楽祭等地域での活動、地域の媒体を使用した広報等丁寧なコミュニケーションを通じ、地域住民からの認知度向上が望まれる。認知のプロセスを通じて、地域のつながりがより強くなることが期待される

② **子どもの地域への愛情や地域への貢献意識の向上：**
地域に関わるプログラムや指導を充実させることで、子どもの地域への愛情や帰属意識を引き続き高めていくこと、それを通じた地域への貢献意識が向上されることが地域住民から望まれている

③ **より広い子どもへの支援・検討：**
公教育支援を含めて、地域内の子どもに対し幅広く支援していくことが望まれる

④ **リーダシップ育成につながるプログラム開発：**
チームを引っ張る、教えあう、等は期待度が高い一方実現度がやや低く認識されている。プログラムや指導方法を改良していくことが望まれる

⑤ **団体の理念や組織運営に関する整理：**
各プログラムで提供する価値が異なるのは、各音楽監督や指導者に任される部分が大きいことが原因として考えられる。今後団体として何をどこまで統一するのか、またしないのか等、議論する必要がある



©2016 Keio SFC Research Institute